

キャリア教育 実践のヒント

キャリア教育に取り組む上で 効果的な外部との連携とは？

地域や企業などの力を活用しながらキャリア教育に取り組む学校は多い。学校外との連携の必要性や実践のヒントについて、国立教育政策研究所の藤田晃之先生へのインタビューと、横浜市立山内中学校の実践から考える。

インタビュー

職業体験を通して生徒の価値観を揺さぶる

国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター総括研究官 藤田晃之

学校外とつながってこそ 生徒の職業観を相対化できる

中学校のキャリア教育の役割は、職業に対する生徒の価値観を豊かにし、生き方や進路に関する現実的探索をすることだと、私は考えています。約7割の中学生は普通科高校に進学し、社会に出るまでに時間がありますから、全員が中学校段階で特定の職業を選ぶ必要はありません。大切なのは、生徒が社会や職業に対する自分の理解の浅さに気付き、大人に学ぼうという気持ちになることです。

中学生は中学生なりに職業観を持っていますが、それは、一部の職業だけを対象にしていたり思い込みが含まれていたりします。その価値観が揺さぶられることで、自分の視野の狭さを実感し、高校以降、具体的に職業を考えていくための素地が出来るのです。

そのための鍵は、産業界などとの連携が握っています。保護者や教師以外の大人とかわり、家庭や学校とは異なる世界を肌で感じてこそ、生徒の職業観が揺さぶられるからです。例えば、職業ごとに違う喜びや厳しさがあることを知れば、生徒は自分の職業理解

が浅く、視野が狭いことに気付き、謙虚な姿勢で社会や大人を見られるようになります。個々の家庭や閉じられた「学校文化」の中でつくられた価値観が相対化されるのです。

生徒の課題に応じて 連携すべき外部人材は異なる

学校外との連携には、まず生徒の実態把握が重要です。教師が目の前の生徒にどのような力を付けたいかを意識してはじめて、生徒のために何をすべきかも見えてくるからです。これはキャリア教育全般に言えることで



ふじた・てるゆき ©1993年筑波大大学院博士課程教育学研究科単位取得退学。中央学院大商学部助教授、筑波大大学院博士課程人間総合科学研究科准教授などを経て、08年4月から現職。博士(教育学)。

すが、特に外部との連携では、職業体験のねらいを明確にし、職場でどのような姿を生徒に見せてほしいかを具体的に伝える必要があります。そうしないと、生徒の普段の様子を知らない学校外の人たちは中学校が何を求めているのが分からず、ただ漫然と職場を見せるだけになってしまうでしょう。

生徒の課題によって、連携すべき学校外の人や機関も異なります。例えば、地域について分かったつもりになっている生徒が多ければ、校区内の農家や工場、地域の病院など、生徒にとって身近な大人に協力を求めましょう。「町の小さな工場」が実は社会生活に欠かせない部品を作っていたり、海外に納品したりしていることを、生徒は知らないものです。身近な職場で大人がどのように働き、社

会とどうかかわっているかを知れば、生徒はそれぞれの仕事について自分がいかに先入観に縛られていたかを、身をもって感じると思えます。そうした実感は単に職場を見学するだけでは得られません。生徒が実際に仕事を手伝ったり体験したり出来るよう、3日から5日ほど時間を確保できるとよいでしょう。

限られた人間関係の中で育ち、知らない相手とのコミュニケーションが苦手な生徒が多ければ、地元から離れた職場を選ぶことも有効でしょう。身近な職場とは違い、数日間に及ぶ体験は難しいことが多く、短時間で主体的に多くを学ぶ必要がありますから、生徒にとって憧れの職場を選ぶと効果的です。ただ、この場合も、身近な職場をじっくり体験する機会は別途設けていた方がいいと思います。よく知っていると思っていた職業ほど、体験を通して気付く意外な面が多く、価値観が揺さぶられるからです。

地元での職場体験を積んだ上で地元から離れた場所で体験させるべきか、順番を逆にするべきか。これには正解はありません。生徒の様子

を見取って決めていただければと思います。また、どの職場を選ぶにしても、事前・事後学習を必ず行いましょう。職業体験のねらいを生徒に伝えた上で送り出し、学校に戻ってからは、そこで何を学んだかを生徒同士で共有させるのです。目的を持って生徒の気付きは多くなり、友だちの体験を知ることによって学びが何倍にもなります。

外部との連携は、共に生徒を育てる仲間づくりになる

学校外との連携を効果的なものにするためには、交渉や打ち合わせなどが必要です。準備に時間が掛かることから、連携への第一歩をなかなか踏み出せないこともあると思います。しかし私は、外部とつながることによって、将来的には先生方の負担は軽くなると思います。共に生徒のためを思い力を伸ばそうとする人たちが、いわば先生方の仲間が学校の外にも出来るからです。活動についても、学校外から出されたアイデアを参考にすれば、新たな工夫につながるかもしれませんね。

3年間を見通して計画的にキャリア教育に取り組むことも大切です。学年間で活動を改善しつつ引き継いでこそ、活動が系統的になりますし、学校外とのつながりも強固になります。学校が一丸となれば、先生方それぞれが負担を分担し合う体制づくりにもつながるのではないのでしょうか。

*プロフィールは取材時のものです

学校事例

神奈川県 横浜市立山内中学校

憧れの場で実感する「相手への思いやり」の大切さ

1年生から段階的に かかわる大人の範囲を広げる

横浜市立山内中学校では、3年間を通してキャリア教育を行う。外部との連携という観点では、1年生は身近な人へのジョブインタビュー、2年生は地域の企業などでの職場体験、3年生は修学旅行で「京ことばのレクチャー」を受けるなど、生徒がかかわる大人

■図1 山内中学校のキャリア教育プログラム（抜粋）

1年生	<ul style="list-style-type: none">●身近な人にジョブインタビュー 生徒が保護者や地域の方などに仕事についてインタビューし、夏休み明けにプレゼンテーションをする●職業講演会 地域から講師をお招きし、仕事についての分科会を行う
2年生	<ul style="list-style-type: none">●1日職場体験 生徒が地域の企業や店舗などを訪問し、職業を体験。「働くこと」の意味・意義を現場で学ぶ
3年生	<ul style="list-style-type: none">●修学旅行での「京ことばのレクチャー」●2011年度は、卒業遠足の機会にディズニーテーマパークでの体験学習に参加 上記を通じて、仕事観、職業観を広げる

*同校の資料を基に編集部で作成

の範囲を段階的に広げられるよう計画している（図1）。

同校の生徒は学習に意欲的で、友だちとの仲も良い。ところが、よく知らない友だちに対しては消極的になったり、初対面の大人を前にすると尻込みしたりする様子が見られた。そこで、キャリア教育では学校外との連携を強く意識してきたと、高瀬茂校長は話す。「普段の生活で生徒が接する大人は限られています。学校外の大人と触れ合う機会をつくることで、コミュニケーションのとり方など、社会で求められる大切な姿勢や能力を身に付け、職業意識や世界観を広げてほしいと考えました」

憧れの場所での体験により 生徒の学ぶ意欲を引き出す

2011年度は、3年生が2月の卒業遠足の機会に、ディズニーテーマパークでの体験学習「ディズニーアカデミー・ワークショップ」に参加した。3学年主任の久保蘭直美先生は、このねらいを次のように話す。

「これから高校という新たな世界に足を踏み出す生徒に、中学校3年間のキャリア教育の締めくくりとして、どの仕事にも共通する、相手の立場に立って思いやる気持ちの大切さを伝えたいと思いました。ディズニーテーマパークは生徒が大好きな場所であり、憧れの職場でもあります。そうした場所で働く人の姿であれば、生徒は自分から注意深く観察し、少しでも多くのことを学び取ろうとすると考えたのです」

ワークショップは、午前（セミナー講習）と午後（パーク体験）の2部形式。午前中はキャスト（パークの従業員）2人が生徒に、あいさつの仕方や身だしなみなど接客で心掛けていることを、実演を交えて説明する。ゲスト（お客様）に道を分かりやすく教える場面では、相手の目を見ながら笑顔で対応する様子が示された（写真）。どの生徒もキャストの話に引き込まれていたと、3学年担任の田中敏行先生は話す。

「キャストの方が良い例と悪い例を共に示してくれたので、生徒は、キャストが何に気

特別企画 キャリア教育実践のヒント



写真 男性キャストが、ゲスト役となった女性のキャストと3人の生徒に、道案内を実演する。男性キャストは、道順だけでなく、目印となる建物や乗り物などを挙げ、丁寧に道を教えた

を付けているかがよく分かったと思います。表情や相づちの打ち方などによって印象が大きく変わることを感じたようです」

午後は生徒がパーク内を観覧しながら、キャストの働く様子を見学した。

「実際にパーク内で働くキャストの姿を見て、午前中の学びが生徒の印象に強く残ったようです。今まで遊びに来た時には気付かなかったキャストの方の配慮や、仕事に対するプロ意識を実感したと思います」（田中先生）

「どの職業でも、どんな場所でも笑顔と礼儀は大切だと学んだ」

ワークショップの事前・事後学習も行った。前日にはこのプログラムに参加するねらいを伝え、翌日には朝のホームルームの時間に感

想を書かせた。キャストの仕事ぶりを尊敬するという声や、学びを今後の生活に生かそうという声が多く見られた（図2）。

「生徒は今まで、デイズニーターマパークは楽しくて当たり前だと思っていたはずで。しかし、ワークショップに参加し、自分が感じる楽しさの裏にはキャストのさまざまな気配りがあることを、身をもって感じたようです。また、普段教師が指導している身だしなみやあいさつの大切さなども、セミナー講習でキャストの方から改めて伝えられたことにより、生徒の心に深く残ったと思います。1年次から『仕事』や『働くこと』に対する意識を高めてきたからこそ、今回の取り組みが学びにつながったと感じます」（田中先生）

だろうと久保蘭先生は期待を寄せる。

「生徒は『仕事』に対する意識を深め、立ち居振る舞いに少し気を付けるだけで周りの人がどれほど気持ちよく過ごせるかという、一生ものの気付きを得られたはずで。ワークショップでの学びを卒業式で早速実践にしよう、生徒と語り合っています」

久保蘭先生は、今後の展望を次のように話します。

「更に充実した学習になるよう、事前に1・2年次の取り組みを振り返らせたり、事後に生徒が互いの感想を聞き合い、気付きを共有したりする時間をしっかり確保したいと考えています。また、外部との連携に掛かる費用についても、検討する必要性を感じています。次年度以降、こうした課題を改善し、学校全体の取り組みとして高めていきたいです」

校長
高瀬 茂



3学年主任、国語科担当
久保蘭直美



3学年担任、英語科担当
田中敏行



横浜市立山内中学校
生徒数◎715人 学級数◎21学級
所在地◎〒225-0002 神奈川県横浜市青葉区美しが丘5-4
TEL ◎045-901-0030
URL ◎ <http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/jhs/yamauchi/>

図2 ワークショップを通して生徒が得た気付き

- ◎毎日多くのお客さんが来る中、たとえ嫌なことや悲しいことがあっても、ゲストを笑顔で迎える仕事をしているキャストの皆さんは、本当にすごいプロだと感じました
- ◎どの職業でもどんな場所でも、笑顔と礼儀は大切だということや、相手の立場に立って自分から行動する自主性の大切さを学びました
- ◎笑顔でアイコンタクトをして元氣よく自分からあいさつすると、された方はとてもうれしいということを実感しました。私もこれから心掛けていきたいです
- ◎以前から、困っている人がいたら自分から行動したいと思っていましたが、これからはキャストの方のように、自分が相手を気遣っていることが相手に分からないように、さりげなく手を差し伸べたいと思います

*同校の資料から編集部が一部抜粋

*プロフィールは取材時のものです